

---

# 春に降る雨

ku-mi

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

春に降る雨

### 【著者名】

NZマーク

### 【作者名】

k u - m . i

### 【あらすじ】

今年も桜が咲かない春が訪れ、雨が降る。いつも傘を用意していたあの人と、不用意だった私。透明な傘が雨を避けるように、あの日、置いてきたものは今でもそこにある。

桜の咲かない四月が終わるとしている。

風の強い朝、ひんやりとする外気に体がきゅっとこわばる。先月  
買つたばかりの白いトレンチコートの前を抑え、点滅を始めた交差  
点を足早にわたる。

ふと見上げれば重く低い雲。朝の天気予報では降水確率は80パ  
ーセントだったのを思い出す。駅を目前にして取りに帰る時間と面  
倒を考えれば、気持ちはすでに会社近くのコンビニエンスストアを  
頼りにしている。そんなふうに、家には透明の傘が増えしていくので  
ある。

春と言つにはまだ早い枯色の町並みでは、北海道出身ではない私  
にとって「ここからがスタート」と気持ちの線引きが難しい。

出会いや別れをこめた春の流行歌に自分を重ねねば、それなりに  
淡い思い出は溢れてくるが、それを優しく包み込む景色がまだ揃つ  
ていない。桃色の花びらが舞う柔らかな温度も、背中を押すあたた  
かい風も。それでも世間ではすでに連休の話題をしているし、自分  
もその輪に入つてどう過ごすかなんて答えてもいる。

そして外に出てまわりを見渡せば、訪問先の担当営業が変わつて  
いたり、駅ビルの雑貨屋の店員が先輩から指導を受けていたり、こ  
の町でも始まりがちゃんとそれに訪れている。

今年、入社してきた新人に対して「最近の子にはついていけない」  
などと今さら言う立場でもないけれど、不透明な境界線のあたりに  
いつも佇んでいるような自分にとつて、彼らは時間の流れを感じさ  
せてくれる存在だ。

今の会社に就職してからもう二年経つ。

入社当初はまだ、学生時代からのアパートに住んでいた。1DKの狭い玄関先で、黒の洒落つ気のないパンプスを履こうとする私。その隣ではテカテカと光沢がかつた紳士靴に靴べらを通す姿。

「今日は傘がいるよ」

それは几帳面なあの人の得意のセリフだった。

毎朝、天気予報のチェックだけはかかさなかつた人。お天氣お姉さんの笑顔を見ないと一日が始まらない、なんて言う姿を横目に、私は小さなテーブルに化粧道具を広げ支度していた。私の方が早く起きたのに準備はいつもある人の方が早く、よく待たせていた。

一人でアパートの階段を駆け下り、近道で地下鉄の駅を目指す。

そんなふうに新しい生活のスタートラインを「せーの」と叫びこともなくいつの間にか超えていた春。そうしていつまでも延長線上にすべてが広がっていくものだと思っていた。

その一瞬<sup>とき</sup>の咲かない桜も、冷たい風も、雨も、すべてが一人がいる場所であることには変わりはなかつた。

やがて私がそのアパートから出て行く日。

整理しきれないまま荷物を押し込めるように、ガムテープで塞いだダンボール。懐かしいもので溢れていた部屋に、静かに積まれて行く寂しさが言葉を奪つていく。

だけどせめて残しておきたい言葉があつた。

口をほどけば弱さまでこぼれてしまいそうになるから、浅い呼吸、小さな声でつぶやいた言葉

今年で何度目の春になるのだろう。

『歓迎会のお知らせ』という社内メール。毎年恒例になつている円山公園でのお花見ジンギスカンである。お花見と言いつつ、肉の焼けた匂いと煙で風流もないと思うのだけど道内ではおなじみの光景。

いわゆる「ジンパ」。

学生時代にはサークル仲間と春の陽気の中、騒いで酔いつぶれた記憶がある。

赤い顔して笑っていた先に、あの人も赤い顔で笑っていた。固形燃料がどうの、と言っていた。どうでもいい話ほどなぜか覚えているものである。

会社のその歓迎会には新人の時に参加したつきりで、それ以降は何だかんだ理由づけて参加していなかつた。

春の喜びくらい、大切な人と分かち合いたいものだ。

なんて言い訳が出来たことの幸せを今更のように感じている。

「今年はどうする」

隣の席から問いかける同僚に即答できない。

斜め向かいの席にちらつと目線を送つてみる。銀フレームのメガネをかけ直しながらパソコンに向かう整った顔がある。

先日、異動して来た桜井さん。綺麗に磨かれた靴と、丁寧な仕事ぶりで私は勝手に几帳面な人だと思っている。

ふいに目が合い、気まずさを隠すように問いかけてみる。

「桜井さんはもちろん、主役だから、歓迎会参加されますよね」

その肩越しに見えた窓の向こうで、静かに振り出していた雨。

「原田さんも、もちろん参加されますよね」

にこりと返つて来たその笑みに、ふと思う。

あの人も、不用意でこの先、雨に体を濡らすことがあるのだろうか。

また一つ、増えた傘。

ジャンピングで軽やかに開いた透明の花は、私の頭上に緩やかなアーチを描き居場所を作ってくれる。そのラインをすべるいくつもの雨が傘の先っぽから落ちていく。

それはまるでもう届くことのない言葉。

灰色の世界の中でこんなふうに確かに区切りがあるよう、今ここに私がいるということは、あの日置ってきたものが、今でもそこにある続けるということかもしない。

家にはまだ、引越しの時のダンボールそのままクローゼットの隅で眠っている。

蓋を開けることがなくて、いつも生活に支障はないようなものが、私にはたくさんあるみたい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3063k/>

---

春に降る雨

2010年10月8日15時23分発行